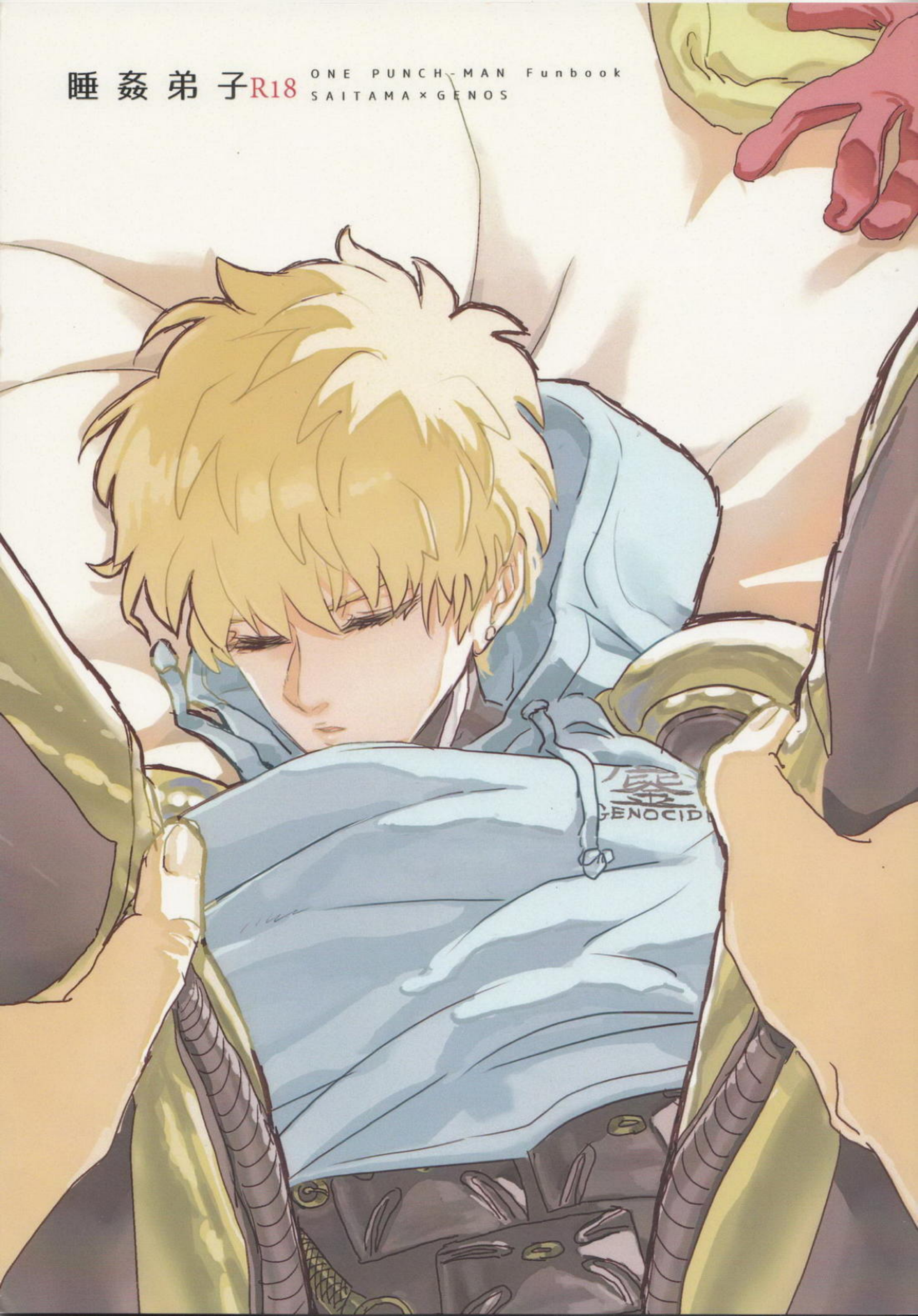
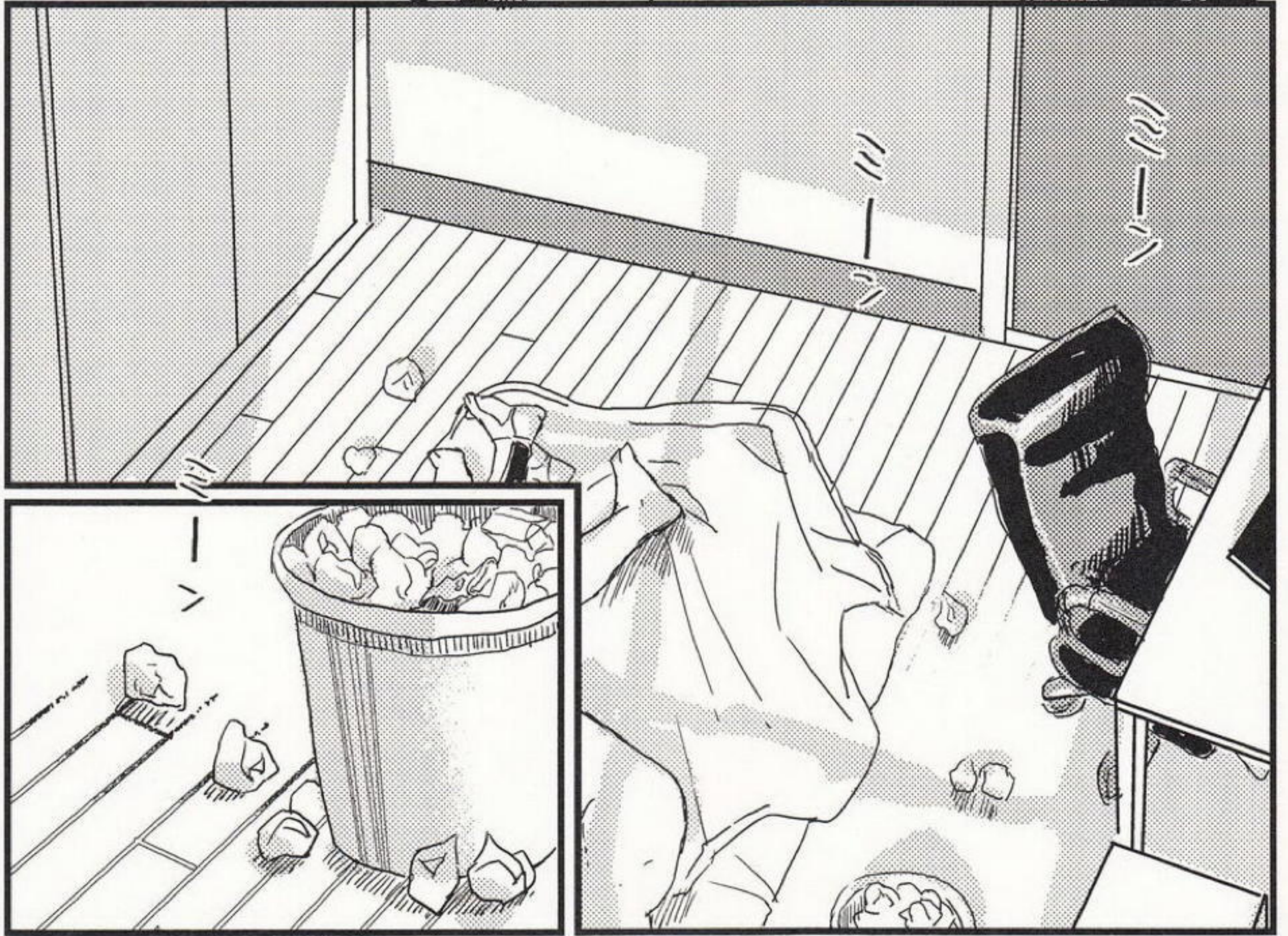
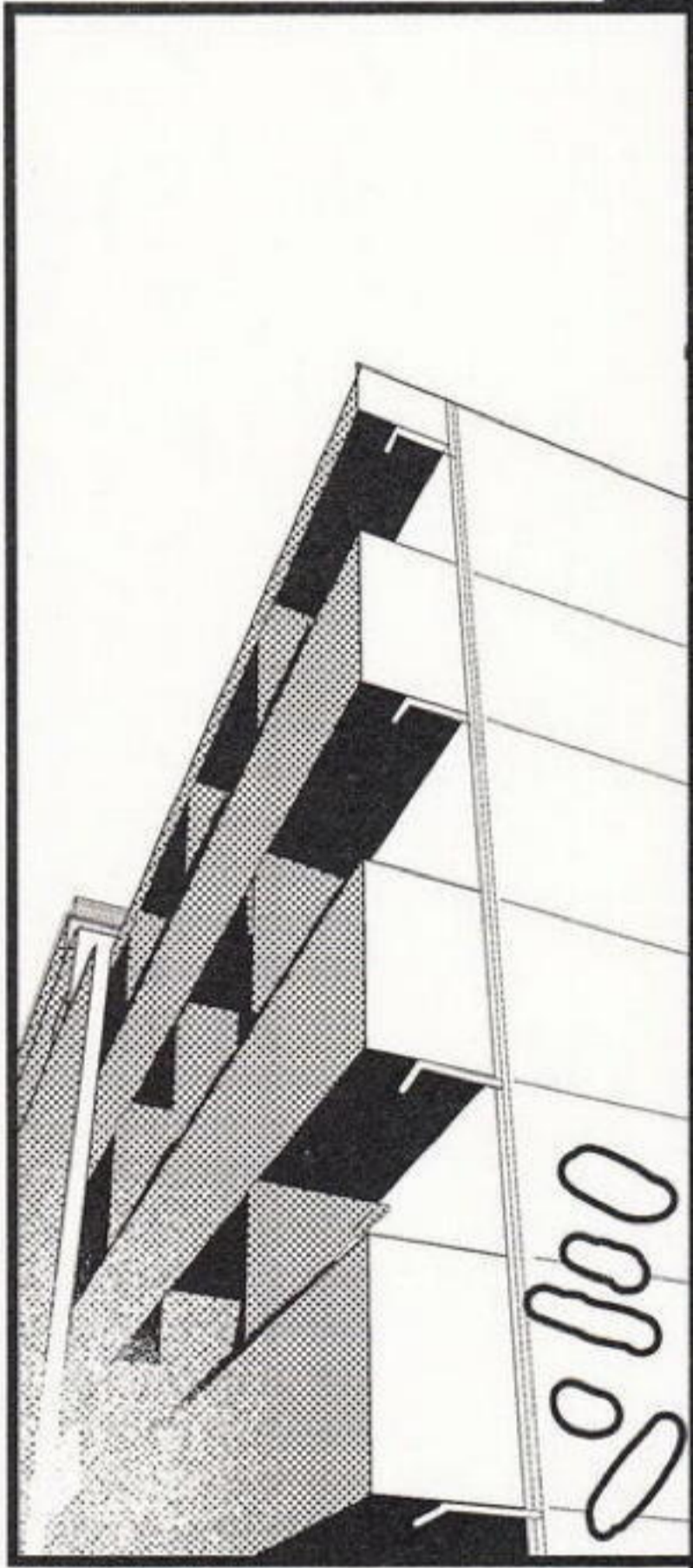


睡姦弟子R18

ONE PUNCH-MAN Funbook
SAITAMA X GENOS







わっ悪い
ジェノス

ちょっと
寝ちゃってた



ってなんだ

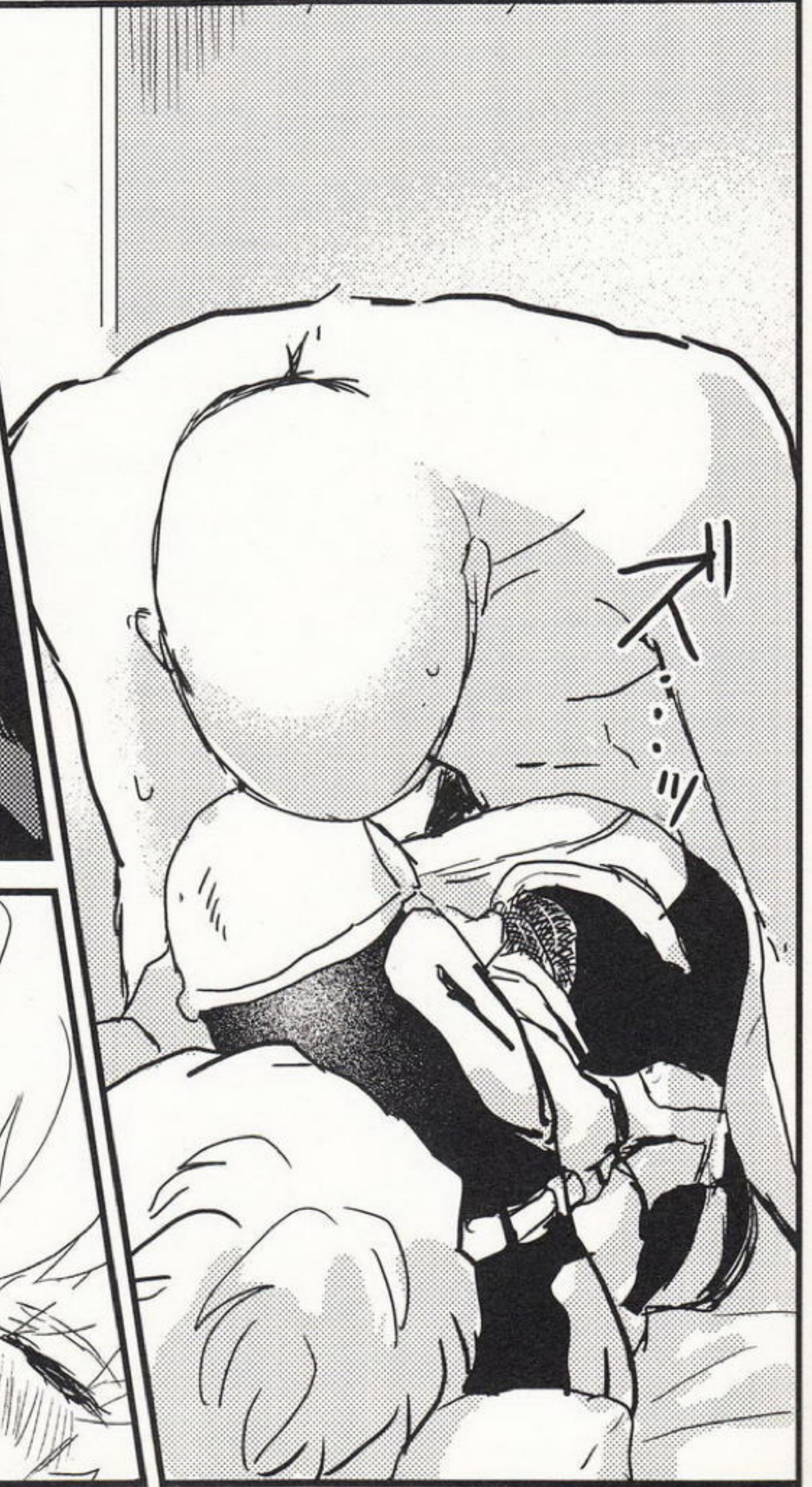
お前も
寝てんのか…



さすがに
疲れたよなあ

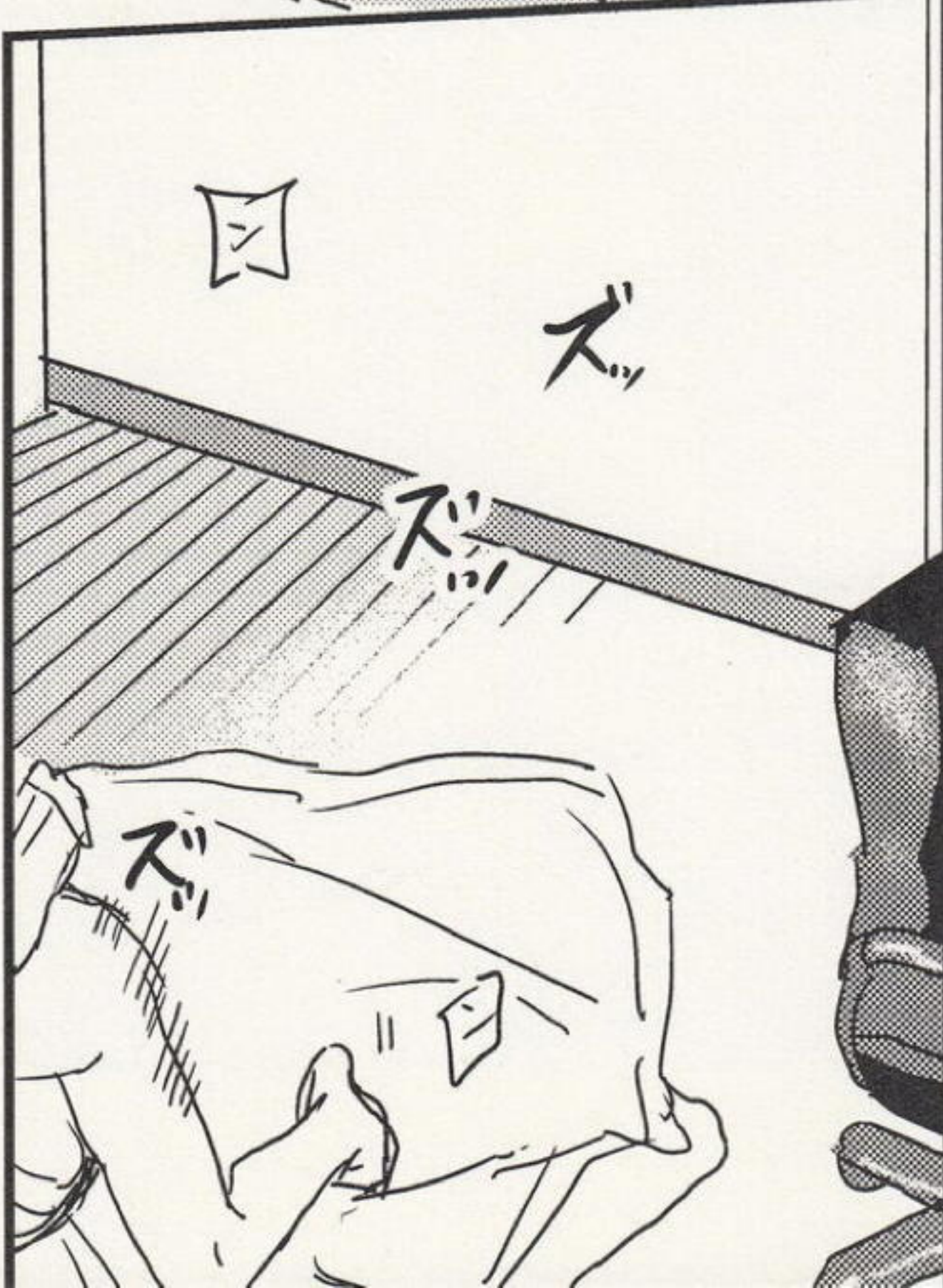
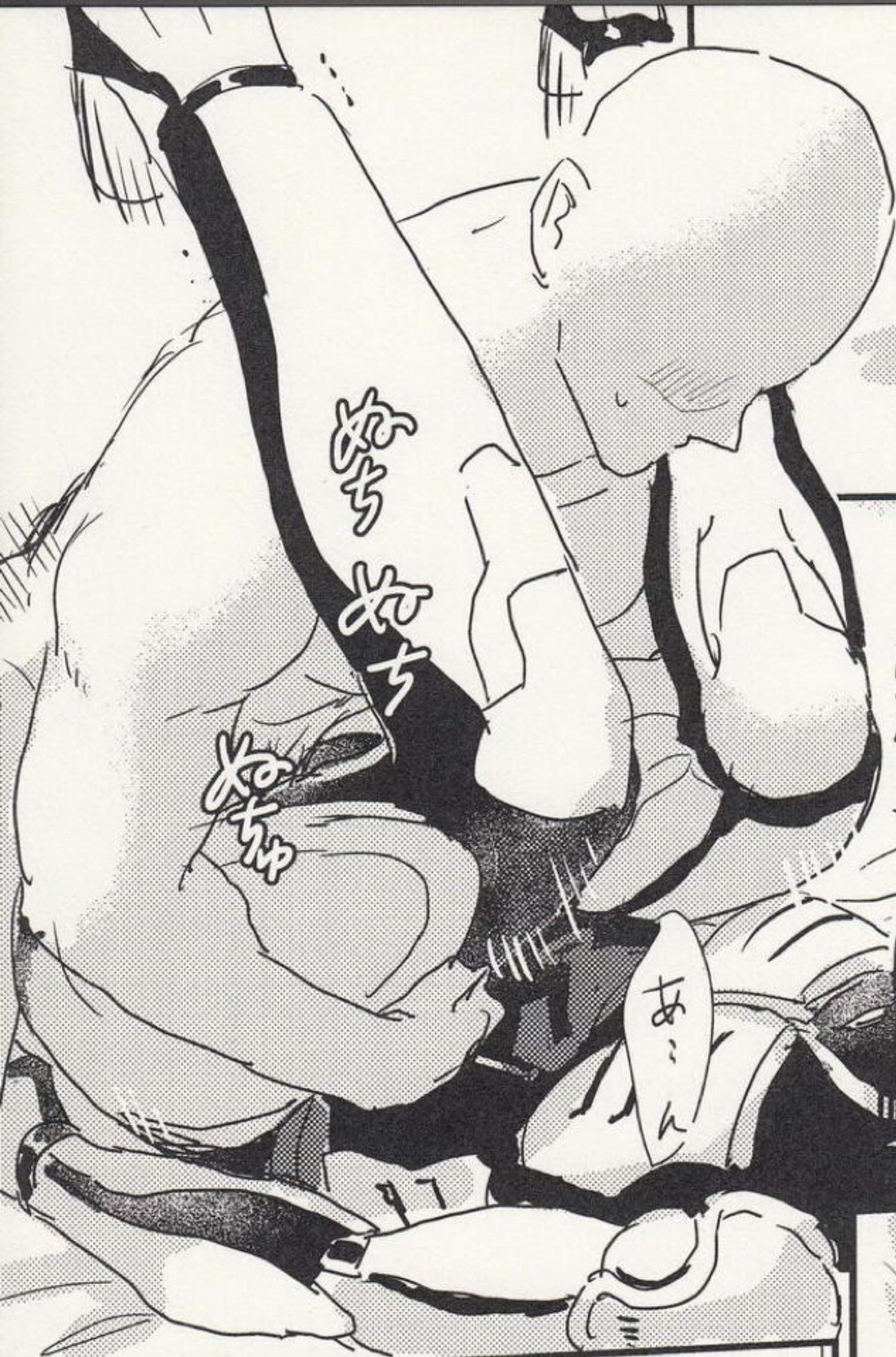
無理させて
ごめんな

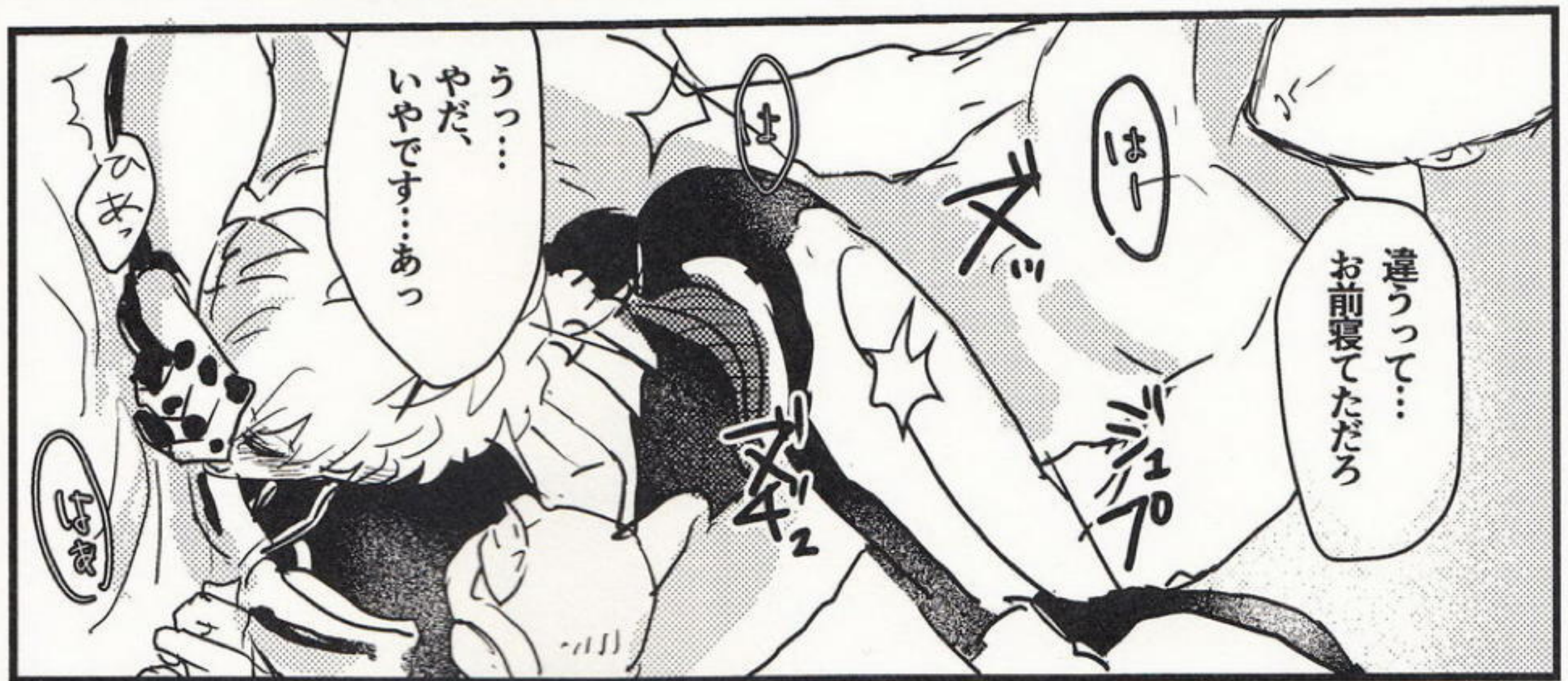
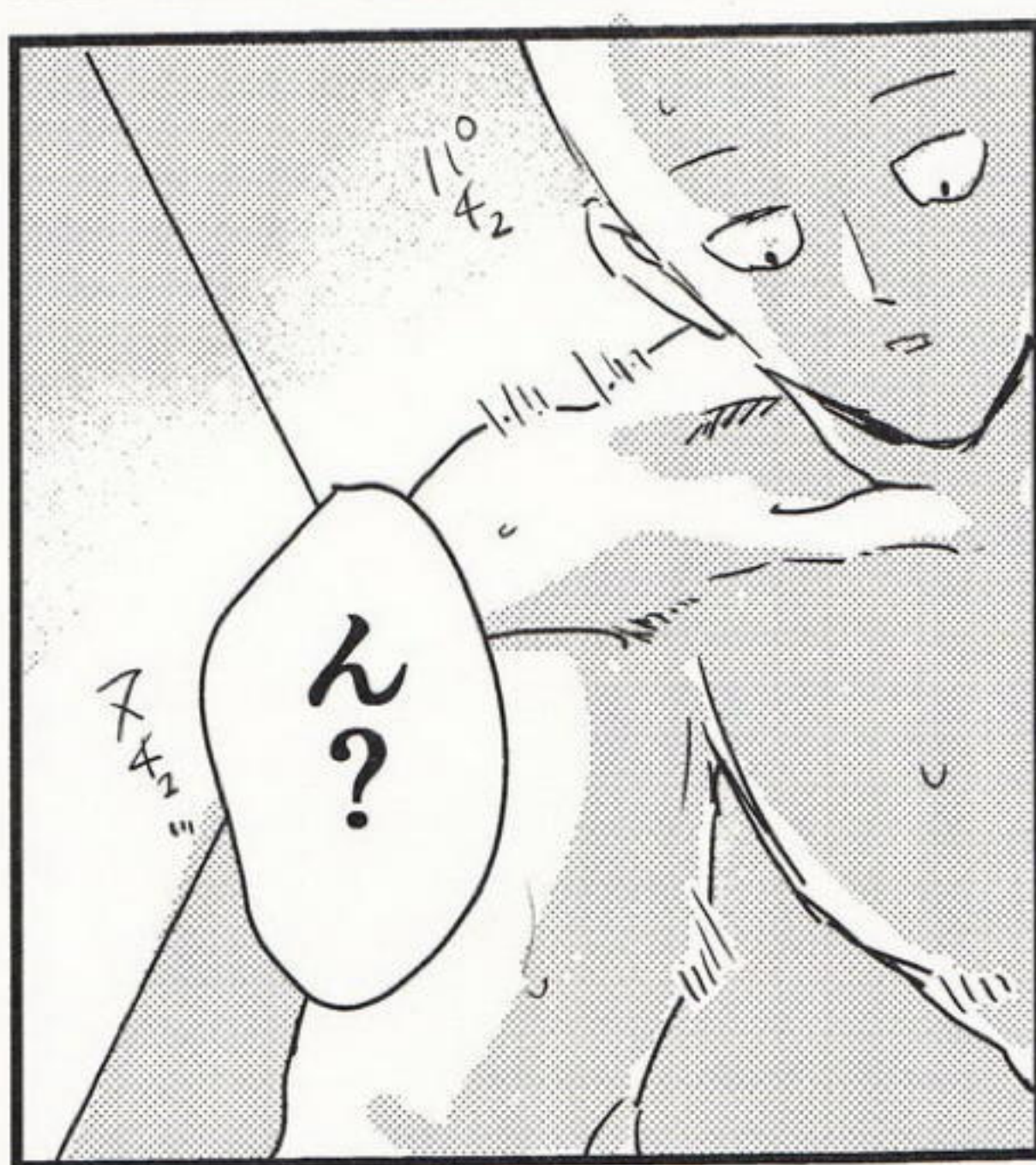
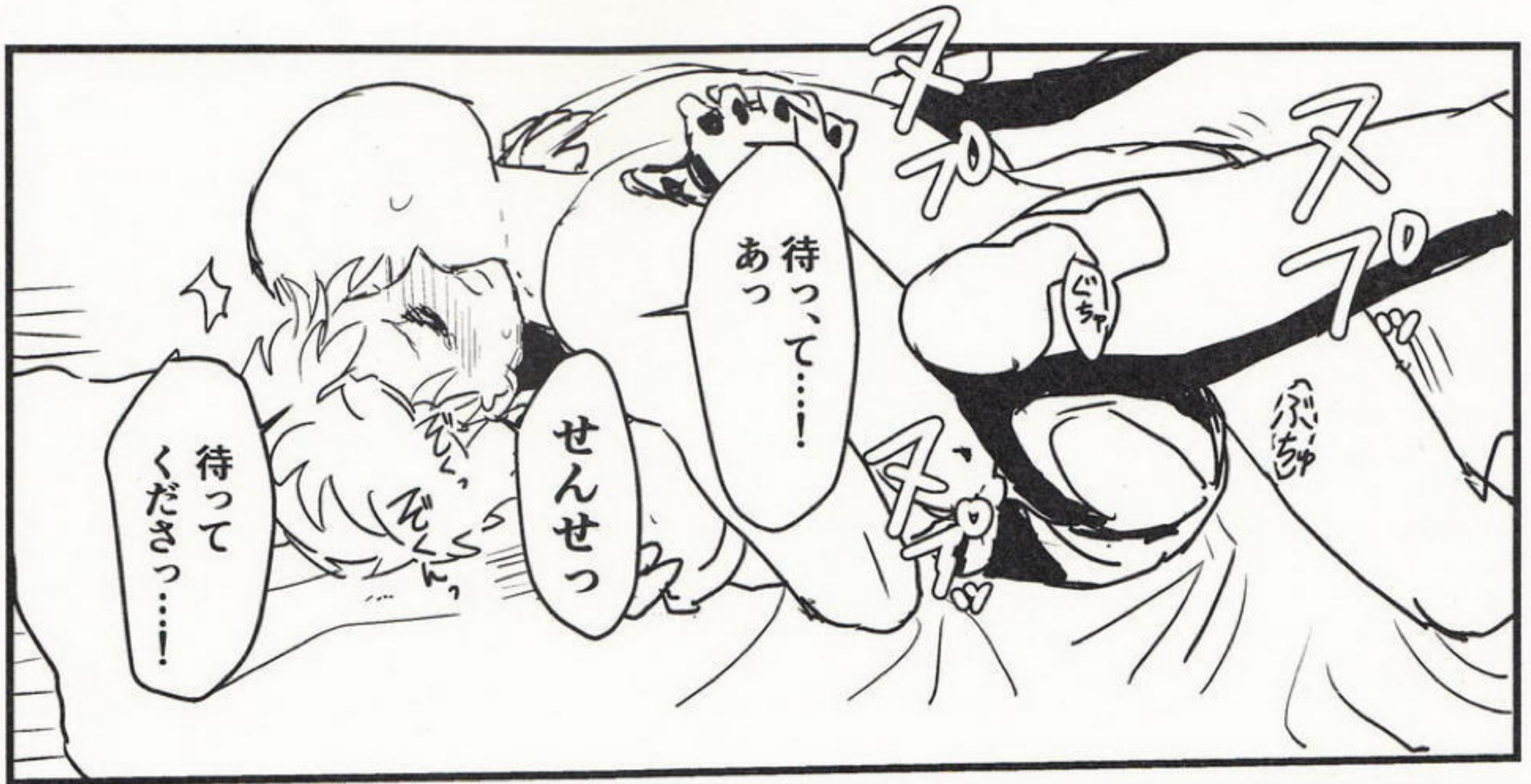
とりあえず
抜かねーと...

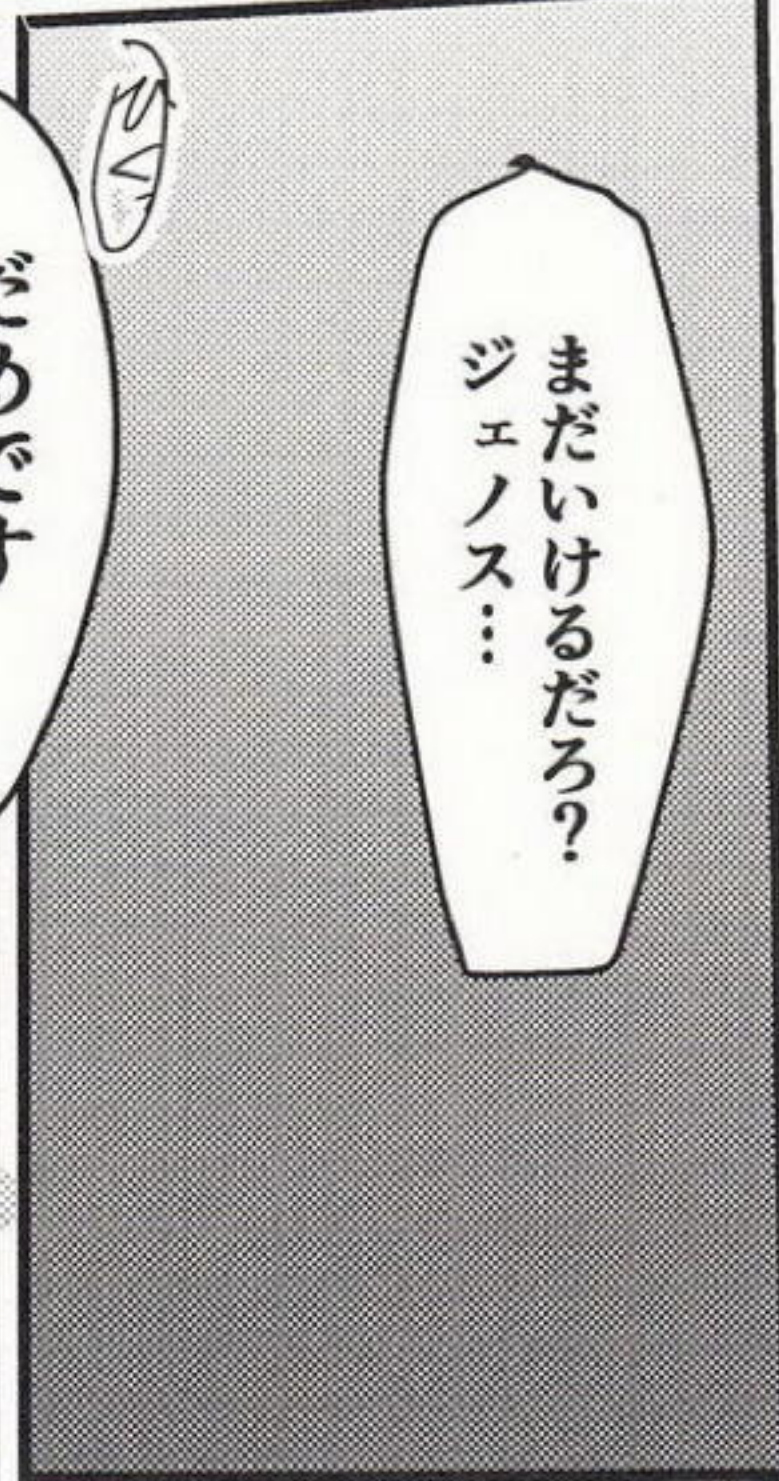
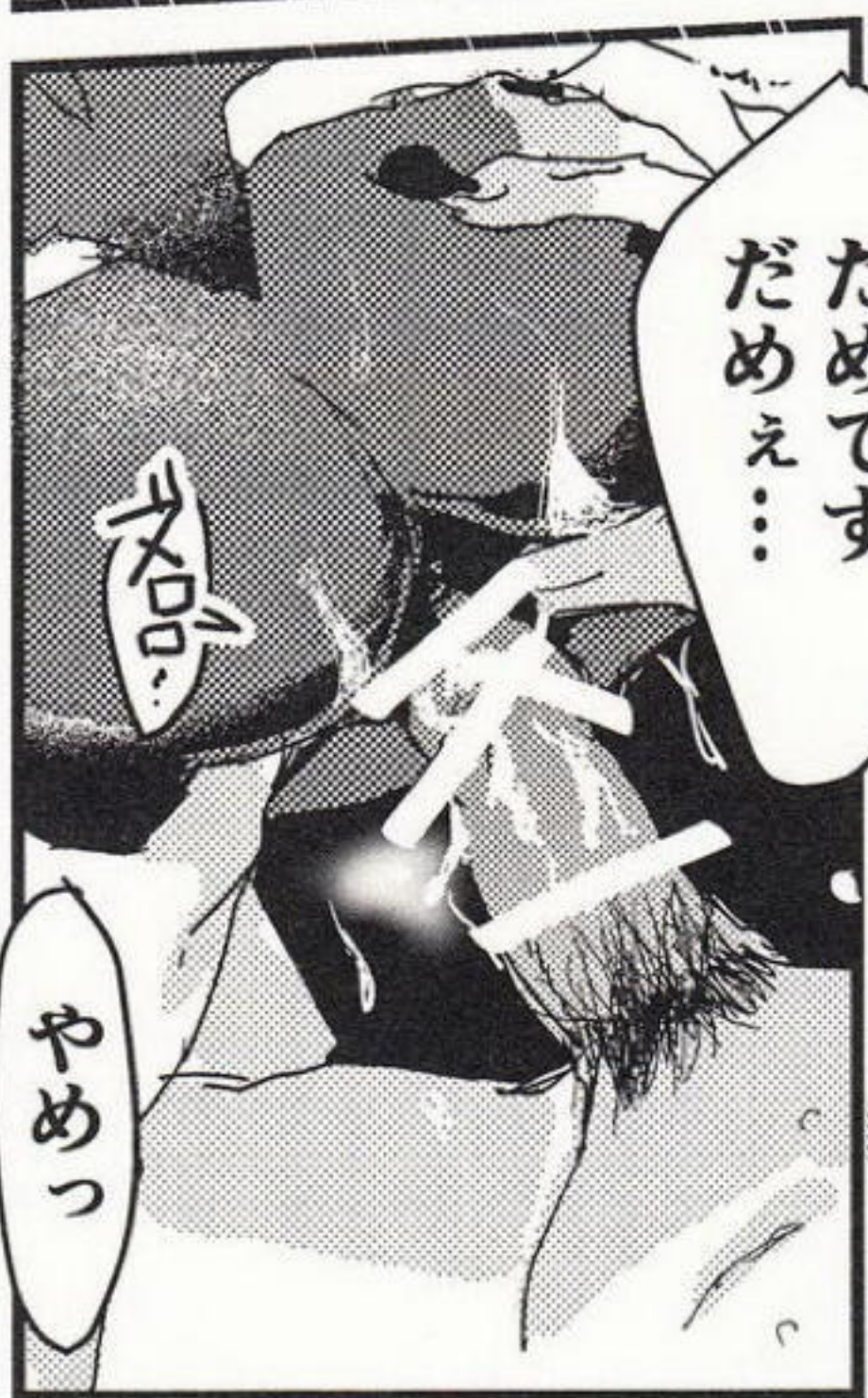


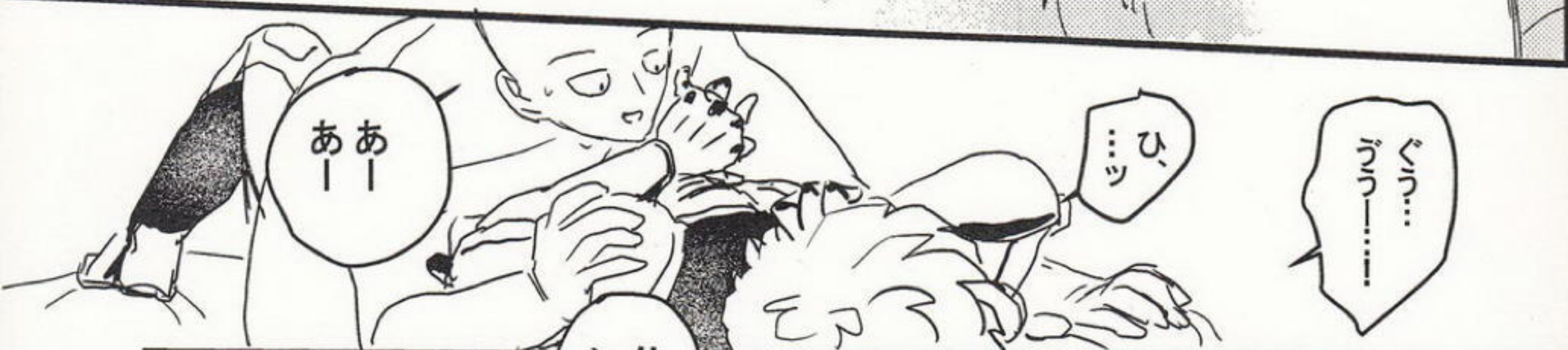
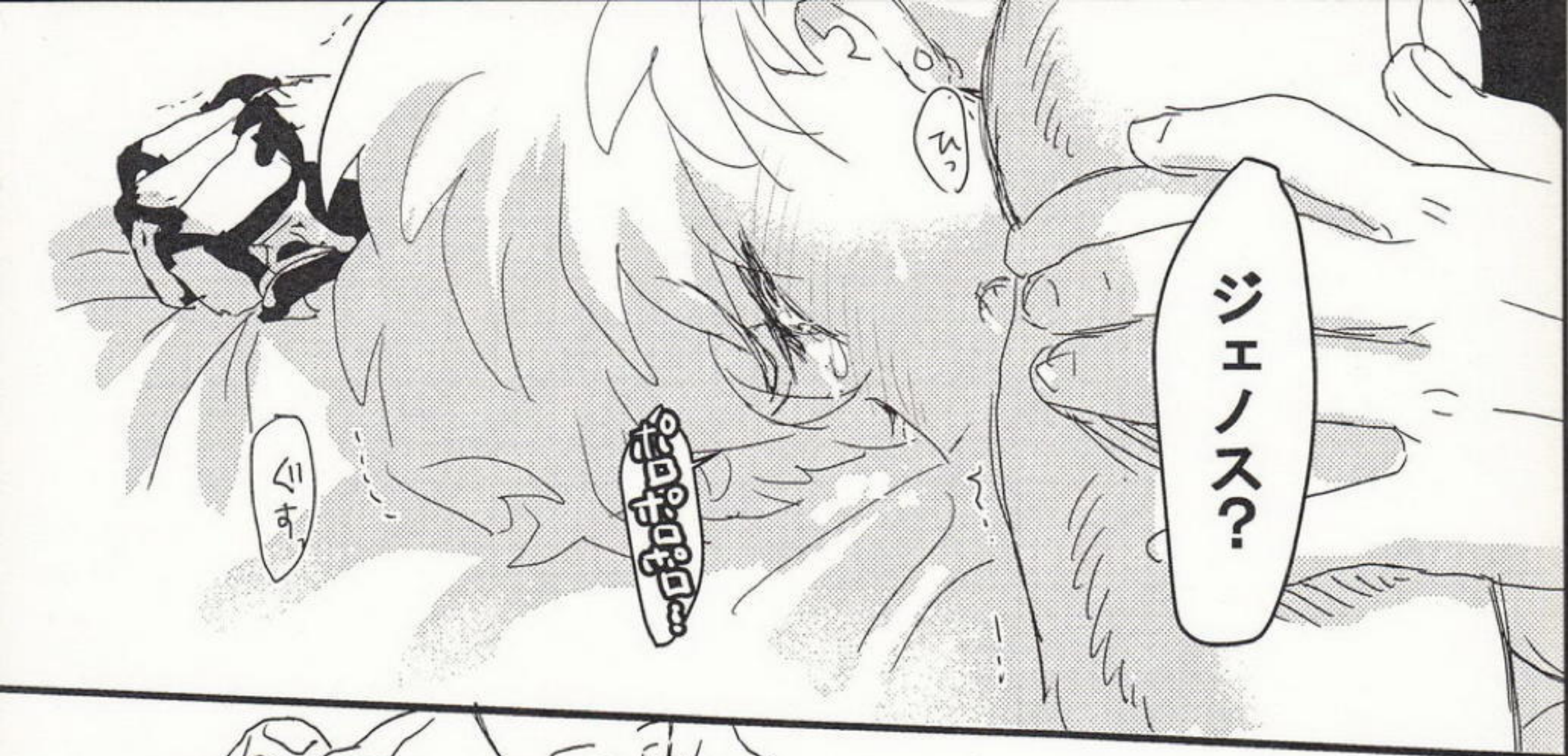
















睡姦弟子

Q

R

S

T

「たーだいま」

玄関を開けてサイタマが帰宅の挨拶をしたが、返答はなかった。

「あれ？ 買い物か？」

言ってからそうではないと気付く。

同居人の靴がきれいに玄関に並べてあったからである。つまりは在宅中というわけだ。

「おーい、ジェノス？」

靴を脱いで三和土にあがる。玄関からリビング兼寝室までは一直線である。距離にしておよそ五メートル。リビングの窓から差し込む光は真夏の午後の眩さである。

深夜まで及んだキングとのカーレース対決にすっかりのめり込んだサイタマは、優雅な昼帰りを果たしたところであった。

「いきなり泊まるって連絡したから怒ってんのかなあ」

彼の弟子兼恋人は、一度拗ねるとなかなか機嫌が戻らないのだ。

——ジェノス氏、怒ってるといけないから。

事情を知っているキングが返り際に渡してくれた飴玉をポケットから出して掌の上にくろりと乗せる。

飴玉ひとつでなんとかなるほど甘いヤツじゃねえよなあ。

苦笑未満に頬を歪めてまたポケットに飴玉を突っ込み、ポリポリと後頭部を掻きながらサイタマはリビングに向かったのであった。

「あれ？」

狭いリビングにも身体の八割を機械化したS級ヒーローの姿はなかった。

次にサイタマが目を向けたのは彼の寝室であるクローゼットである。

お互いの思いを伝え合ったのだから一緒に布団で寝ればいいのに、という言葉にジェノスは、

——いいえ、俺は先生の弟子でもあるんです。なあなあの関係になりたくて気持ちを告げたわけではないので。

そうきっぱりと言いつつ放ったのだ。

ジェノスは強くなりたくてサイタマの元へとやってきたのだ。その意思は尊重するべきだと思ひ、サイタマも今後もクローゼットで寝ることを許可したのだった。

直截的な肉体関係は今のところない。とはいえ全くないわけでもない。

身体を繋げたくて恋人になったわけではないが、好きな相手と四六時中ずつと共にいて性的欲求が刺激されないわけでもない。

ジェノスのいないクローゼットの扉を閉めながら、いつかそういう関係になった時は一緒に布団で朝を迎えることができればいいなと漠然と考えた。

「んじや風呂かなあ。掃除してんのか？」

それともサイタマが帰宅して来るのを察知して隠れてしまったのだろうか。

そこまで子供っぽい真似をするだろうかと首を傾げたが、彼は十分に子供だろうと無意識下で警鐘が鳴った。

リビングを出て風呂場に向かう途中でなんとなく、本当になんとなくだが、台所へと目を向けた。

「うえっつ!!」

驚きのあまり胃袋が口から飛び出してくるのかと思うほどの衝撃に、サイタマは声を裏返し慌ててキツチンスペースへと足を踏み入れたのだった。

そこにはシンクを背にして、十九歳のイケメンサイボーグヒーローが足を投げ出し、ぐったりとした態で座り込んでいたのだった。

——まあまあ少し落ち着きなさい。

電話の向こう側で穏やかな声がサイタマの興奮をゆっくりと宥めすかす口調でそう告げた。

ジェノスの状態に驚き取り乱したサイタマではあったが、同時に冷静さは失ってはいなかった。

表情は穏やか。

外傷はない。

呼吸は整っている。

脈拍は、不明。

心拍も、不明。

呼びかけには軽く鼻を鳴らすようなものではあったが「ん」と答えることはできなかった。

それだけはわかったが、逆に言えばそれだけしかわからない。

相手が生身の肉体を持っていればまだ応急処置の仕様もあるし、すぐに病院に駆けつけられるが生憎とジェノスはそうではなかった。

急いでジェノスの私物を漁り、中から傷まみれの携帯電話を発見した。協会から普及されたものではない。ジェノスの個人所有のものである。電話帳にメモリされていたのはたったの二件だった。

ひとつはサイタマ。

ひとつはクセーノ博士。

サイタマはすぐにジェノスの身体をサイボーグ化した正義の天才博士へと

連絡をし、そして現在に至るのであった。時間にして、サイタマがジェノスを発見してから二分後のことである。

「俺は落ち着いてんよ」

——焦りは隠せるものではないよ、サイタマくん。

ほっほっほ、と語尾に笑い声が続いた。苛立ちの棘がサイタマの心に生まれる。随分と暢気な博士ではないか。

「とにかく、ジェノスが変だ。診に来てくれ」

できるだけ平静を意識してそう要請したがこれには、ううむ、と博士が短く唸る。

そうじゃなあとのんびりとした声が続いた。

——呼吸は正常。外傷はなし、ということじゃな。コアに少し触れてみてくれんか？

言われてサイタマは目をしばたかせた。コアと聞いても一瞬びんとこなかったのだ。

「えーつと、こ、こあ、って胸んとコだよな」

そうじゃと肯定の返事にほっとする。

恐る恐るサイタマの手がジェノスの胸部に伸ばされた。

鼓膜に博士の声が丁寧に触れた。

——チェストプレートは本人の意思、あるいは研究所での機器でしかオープンされない仕組みじゃ。プレートの上から触ってもらっただけでいい。

「お、おう。わかった」

そつと触れるとそこはほんのりと温かい。人肌と変わらないものだった。博士にそう告げると、うーむ、とまた博士は唸った。

——ひよつとして、寝ている、だけではないのかね？

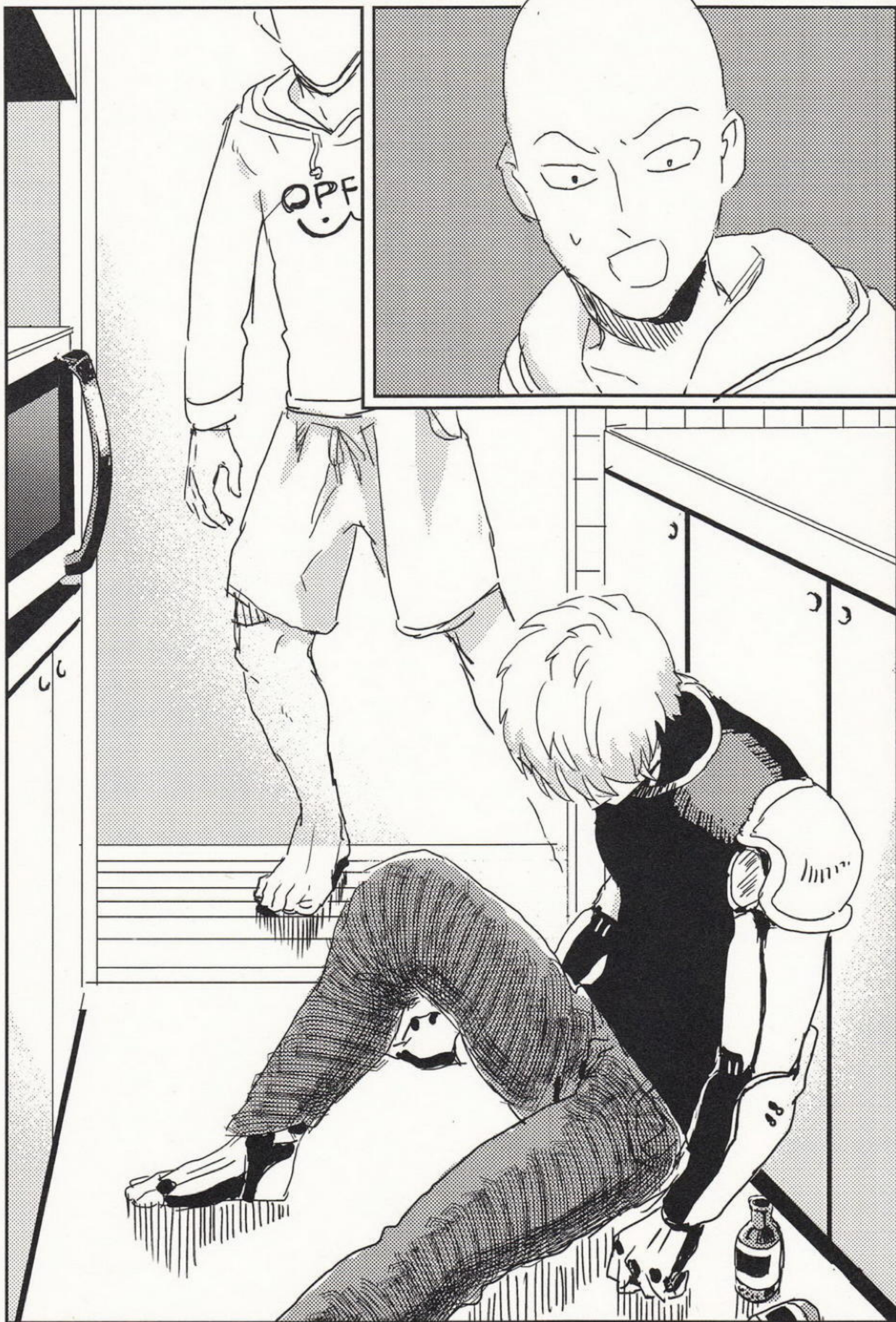
穿つ様子にサイタマは珍しく慄然とした。

「こいつが昼寝してるところなんか見たことねえんだけど」

——昨夜、遅くまで起きておった可能性は？

サイタマは押し黙る。無いとは言いつてもいい。なにせ昨夜遅くに電話をした際、たしかにその声には僅かといえ怒りの色はあったからだ。

あれからすぐに寝たとは考えにくい。



……晩飯、作って待ってたんだよなあ、多分。

それなのに日付変更線を超えるぎりぎりのラインで今日は帰らないと言われて、かといって反論も反抗も出来ない弟子兼恋人がいつもと変わらぬ就寝時間を迎えられると可能性に思いを馳せてみる。

「……まあ否定できねえかも」

実は、と話し始めると、全てを聞き終わったクセーノ博士は「ほう」と最後に頷くと、

——サイタマくん。もしかしてジェノスの近くにドリンクの容器がないかね？ 小さなガラス瓶なのじゃが。

「ドリンク？」

言われてきよろきよろと視線を走らせた。するとジェノスの身体の向こう側に手の平サイズの硝子瓶が転がっていた。眉を顰めて拾い上げる。

「……ジェノビタンD？」

色、形、大きさは市販されている栄養ドリンクと酷似していた。小さなシールが貼り付けてあり、手書きの文字をサイタマは声に出して読んでみた。

ふむ。やはりジェノビタンか。

博士は既に理解しているのだろう。納得した様子に、サイタマはまた腕を伸ばした。

「ふたつ、あるんだけど」

二個目の瓶をつまみ上げてそう告げると、

「なんじゃってええええ!!」

老人とは思えぬ大音量が殆ど質量を伴ってサイタマの鼓膜を突き破ったのだった。キンキンと頭蓋の中で博士の声が乱反射を繰り返す。

「ふつ、ふたつとは二個ということかねっ!!」

耳に密着させなくとも十分に聞こえる音量であったので、サイタマは電話を顔側面から裕に十五センチは離れた。

「……そりやまあ、そうだけど」

淡々とサイタマがそう口にする、電話の向こうで深い嘆息が聞こえた。やれやれ、と小さな音がその中にまぎれた。

——困った子じやのう。

「どういうことだ？」

最初は驚愕していたわりには、次の瞬間には随分とあっさりとした反応である。不審そうなサイタマの耳に次に届いたのは博士の苦笑であった。

厭な種類のものではない。

仔猫の悪戯を見咎めるような、仔犬の噛み癖に肩を竦めるような、あるいは、小さな子供が捏ねる駄々の根底にある愛情を見つけた親が漏らすような、そんな苦笑であった。

博士は老人らしい沈着の声で説明を始めたのであった。

「ん、わかった。目え覚めたら連絡させるわ。じゃ」

第三者が聞けば随分と素っ気の無い言い方で、サイタマは通話を終えた。よろしく頼むよ、と告げた博士の声を脳内で繰り返しながら電話をシンクの

横に置き、サイタマはジェノスの横にしゃがみこむ。

博士曰く、ジェノビタンDとは脳味噌に負担が掛かりやすいジェノスの為

に、その負荷を少しでも軽くする目的で博士が研究開発したストレス軽減に特化したドリンク剤であるらしい。

用量は一回に瓶の半分ほどを目安にしているが、もし不眠や大きな不安な

どを抱えていれば倍を飲んでもいいとしている。

——ジェノスはそれを二本も空けたってわけか。

サイタマが唸ると、博士は軽く笑った。

——ほっほ。サイタマ君が朝帰りをするのがイヤだったのかもしれないのう。まだまだ寂しがりやの子供なんだな。

このジイサン、どこまで把握済みだ、と半眼になったサイタマに博士はなおも続けた。

簡単に受けた説明はつまり、こういうことだった。

効果としては適量ならば深い眠りに落ちたり、気分が少し高揚してきたりというものだが、しかしながら過度の摂取は生身の肉体を持った人間でい

ば泥酔と同じ状態に陥ったと思えばいい。とはいえ過剰量にいたったとしても決して毒にならないことは本人もよく知っている。

身体の弛緩、思考の散漫、支離滅裂な行動、というところかな、とんでもないことのように告げる博士に、サイタマは頭を抱えた。

つまりは酔っ払いの面倒を見ることになるわけだ。

実際にアルコールを摂取したわけではないので二日酔いもないし、半日もすれば普段通りに日常を過ごせるだろうという説明にはさすがに胸を撫でおろした。二日酔いの辛さはまだジェノスには早い。

「……寂しかったのか？」

熟睡する顔を覗き込みながら小さく訊いた。もちろん、答えはない。

端的に言ってしまう必要するに自棄酒のようなものなのだ。

普段からそう互いにべったりという関係ではない。ヒーローランクが違えば活躍の場を違えることも多いし、ジェノスはジェノスで狂サイボーグについて一人で遠くに出たりもする。サイタマもまた一人でふらりと適当にぶらぶらしたり、ジェノスに何も伝えずに災害現場に訪れたりもする。

「でもまあここ最近、二人でゆっくりしてなかったもんな」

思い返してみればここ十日ほどは擦れ違う生活であった。顔を全く合わせないし、ほどでもないが、ゆったりとした時間の中で互いの顔を見ながら他愛のない話をするようなこともなかった。

思いを伝え合って三ヶ月。

誰かと付き合った経験がないサイタマではあるが、そろそろ気の緩みが出てくる時期なのだろう。

放置してもジェノスははずっと俺を好きでいてくれる、なんて甘えがひよつとしたらどこかにあったのかもしれない。

「……よくわかんねえけど、恋とか愛とかも、トレーニングと一緒なのかもしれないねえなあ」

つまりは——怠けると腐る。

「寂しかったよなあ」

まだまだ寂しがりやの子供なんでな、と笑ったあの時の博士の顔は、もし

かしたら苦笑というものではなくもつと寂しいものかもしれない。

くーくーと規則的な寝息に、サイタマは目を細める。さて、布団でも敷いてそこに寝かせてやるか、と抱きかかえようと身体を乗り出した。

「お、ヨダレ」

ジェノスの小さな口の端から唾液がとろりと小さな筋を作って流れていた。

「ヨダレとか垂らすのか、こいつも。酔っ払いだからか？」

笑ってその唇に親指を押し当てた。横に拭おうとした瞬間、

「……ん、」

ジェノスがサイタマの指先を軽く舐め上げた。ちろりと、猫科の動物が満足そうに舌を己の口元に這わせるように。ちろちろと、赤い舌先がサイタマの親指に何度も触れては離れていく。

「……っ！」

ぴりつとサイタマの脊髄で悪寒が弾けた。

初めての感触に目を見開いてから、生まれて初めてというほどの緊張感の中でジェノスの唇に、もう一度、と親指を押し付ける。

「……んう、ん」

柔らかく湿った唇からまた舌を覗かせてジェノスはサイタマの指先をちろちろと舐め始めた。初めての食べ物を見た野生動物のように、興味と警戒とを持ち合わせた動きであった。

やがて動きは大胆になり、まるでアイスクリームでも舐めるようなそれに変わってきた。れる、と舌が大きくサイタマの親指を根元から指先へと這う。

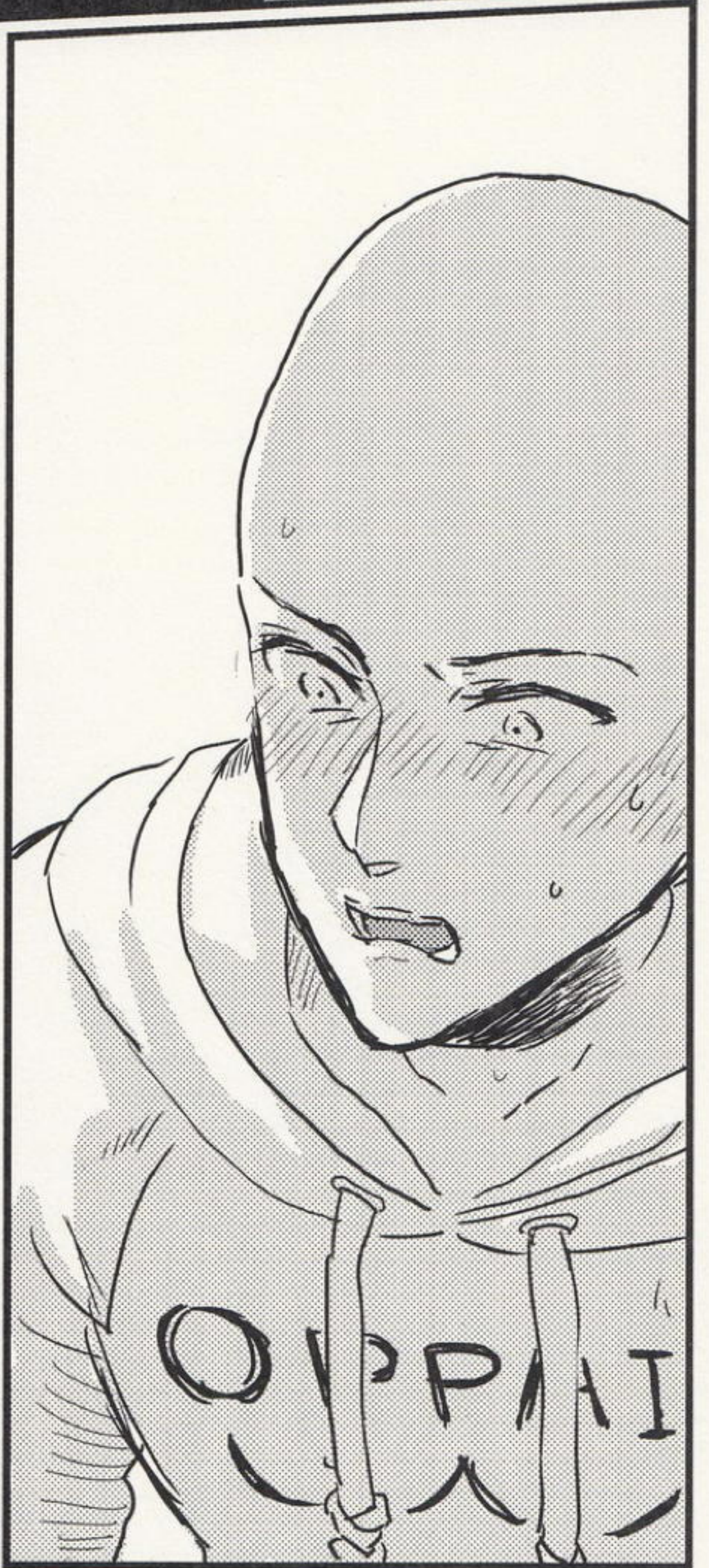
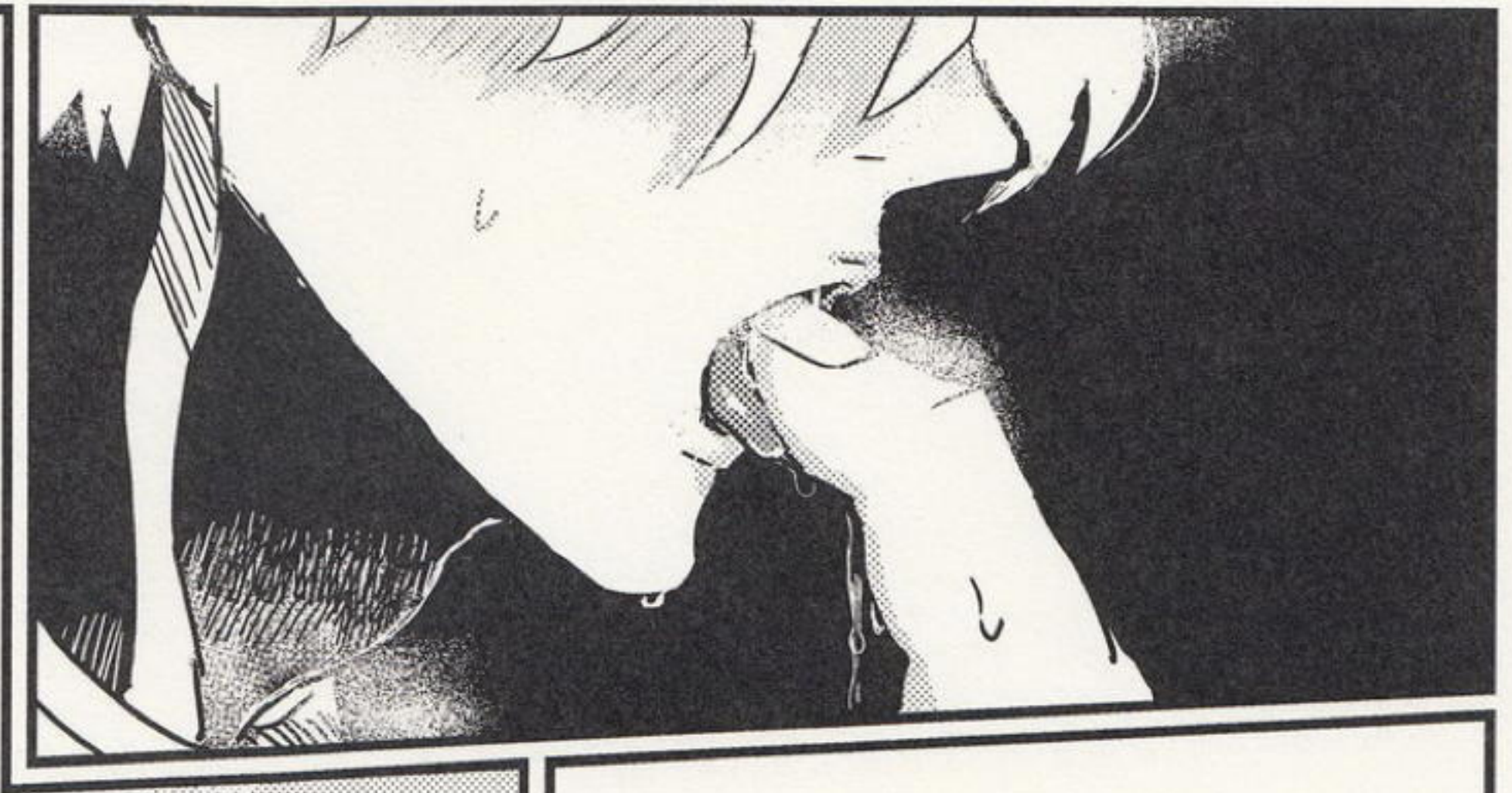
ぞわつと全身の産毛が逆立つ感覚に目の前が一瞬揺れた。

快感とはこういうことなのかと、神経がざわめきだす。

自慰行為で得られる快感など、所詮はただの摩擦でしかないと思いついた。さされた気分だった。

いやいや、酔っ払いって寝ぼけてる相手に指舐めさすってダメだろ、と首を左右にぶんぶん振ったその時だった。

ちゅ、ちゅ、と今度はリップ音を立ててジェノスはサイタマの指先を吸いだした。



「え？ え？ 吸うの!？」

驚くサイタマを尻目に、ぱく、と啜えて舌先を蠢かしながらジェノスはおも吸い続けた。唇の内側の肉がサイタマの皮膚に密着して上下の歯が穏やかに甘噛みをしてくる。

前述したが、サイタマとジェノスにはまだ直截的な肉体関係はない。

だが、キスは何度となくしてきたし、いわゆる兜合わせというものも何度かやってみた。

互いの亀頭を密着させ刺激しあいながら、己の性器に他人の手が触れ、そして擦りあげていくというこの男性同士の性行為は、底なし沼のような快楽を二人に与えた。どこまで落ちるか分からない恐怖と向き合うには、二人は少しばかり純粹すぎたかもしれない。

付き合って三ヶ月だが、この行為に及んだのは僅か四回である。

「……………」

ごく、と咽喉を鳴らしてサイタマはジェノスの唇に人差し指も押し当てた。ちよつとだけ、と誰にともなく言い訳をする。

すると待ち構えていたかのように薄い唇がぱくりと二本の指を同時に迎え入れてちゅうちゅうと吸い出した。

「指だけで、こんなに気持ちいいなら、もしこれが、」

フェラチオだったら、と想像してかあつと下半身に血液が集中した。ねつとりと絡みつく舌の動きがダイレクトにサイタマの陰茎に繋がった。

指先とちんこって神経連動してんの!？」

ありえない人体の不思議を想像しながらまた指を一本増やした。

「ん、う、む」

さすがに大の男の指が三本は多いのか、ジェノスが少し苦しそうに眉根を寄せた。だがそれでも懸命に吸い付いてくる。

ずつと口を開けているからだろう。だらりと透明の唾液があふれてジェノスの顎を伝い、その衣服を汚していく。それがひどく退廃的でサイタマはまた目の前の景色が歪むのを感じた。

「ん、んふ、ふー、う、」

呼吸を荒げながら必死にしゃぶり付く媚態にサイタマは股間が硬くなつていくのを悟った。

——もし、もし、今こいつの口許にちんこを押し当てたら、そう想像しかけて「いやいやいや！」と声を上げてその考えを追い払う。いくら恋人でもそれはない。

深い酩酊状態で熟睡している相手に合意を得ることもなく、だまし討ちのような形でオーラルセックスに持ち込むなどそれはレイプだ。

あとでトイレで抜こう、と決意すると、サイタマはジェノスの口から己の指を引き抜いた。

「あ、」

途端に切ない声がジェノスから漏れた。

たしかに寝ている。なのに、ジェノスはぐず、と鼻を鳴らしたのだ。

「……………へんへえ……………やら……………へんへえの、におい、もつと」

拗ねる子供の口調で、だが余りにも婀娜を含ませてジェノスはおもねるようにねだった。

「やだ、やらあ……………へんへえ、もつと、もつとおれの、おれのに」

舌をだらりと出してジェノスが追いかけるのにサイタマは目を見開いた。

「おれのなかに、いて……………おれの、へんへ」

「……………ジェノス!!!」

たまらずサイタマは両腕でその身体を掻き抱いた。「あ」とジェノスの細い声が漏れる。だがそれに構わずサイタマは乱暴にジェノスの唇を塞いだ。

すぐに唇が割れてジェノスの舌がサイタマの口腔へと侵入してきた。

ぬめる舌同士が絡み合い、そこから全身に甘い痺れが一気に拡がる。脳味噌の代わりに頭蓋の中を綿菓子で支配する。

じゅつ、じゅる、と大きな音をわざと立ててサイタマはジェノスの唾液をすすった。それだけでジェノスの背中が大きくしなり、腰がひくひくと跳ねた。

「ん、んふ、へ、へんへっ」

「ジェノスジェノス」

荒くなった呼吸も互いに口内でぶつけ合い、それが嵐を呼んで二人の体内で甘く切なく胸を揺るがし、そして火種のある場所を曝け出していく。

抱きたい。今すぐにこいつとひとつになりたい。

こんなに強く思ったのは初めてだった。

狭いキツチンスペースであちこち身体をぶつけながら、サイタマはジェノスの腰をさすり、指を絡め、髪を梳き、唇を吸った。

「……酔っ払い相手にヤルわけにはいかねえけど」

長く激しいキスを終えて顔を離すと、ジェノスは恍惚の顔で

「ひゅき、へんへえ、……しゅき……」

とろりとした声で何度も繰り返していた。普段のジェノスからは想像もできない滑舌の悪さで、酔いの勢いにストッパを無くした心があふれていく。すき。

せんせい。

おれの、せんせい。

サイタマはジェノスを横抱きにするトリピングへと向かった。その身体を床にそつと横たえさせた。布団を敷こうと立ち上がる際に頬に唇を押し当てると、ジェノスはくすぐったそうに笑った。

「お前、起きたら覚悟しとけよ？」

額をこつんと指で突いてついでのような角度で窓の外を見た。夏の昼下がりのだ。なんとなくポケットに手を入れて、指先に当たる存在に飴玉を入れているのを思い出す。

掌で軽く転がしてからサイタマは眉を上下させた。

ぱくりと無造作に口の中に放り込む。

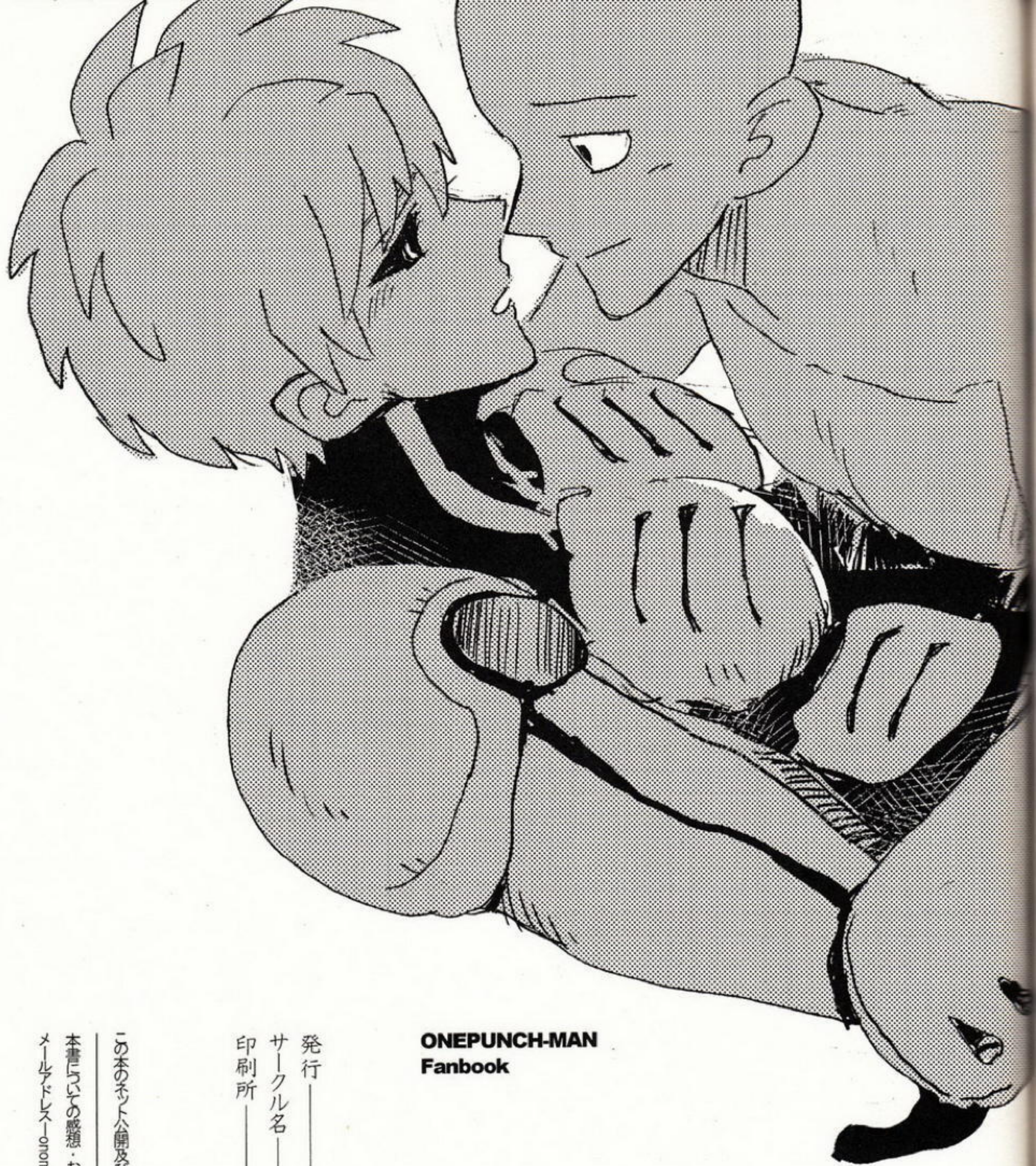
しばらくは黙って舐めていたが、サイタマは微妙な表情を作ってがりがりと噛み砕いてしまった。ジェノスの舌の持つ甘さに比べれば飴玉の持つそれなど無味無臭に近いものだった。

「……ジェノス」

砕けた飴玉の欠片が咽喉を通過する際に、わずかに食堂を攻撃するように存在を主張した気がする。ごくりとサイタマの咽喉仏が上下した。

ジェノスがいなくなればサイタマの世界からあらゆる味がなくなってしま
うだろう。

その予感を夏の日差しが地表に焦げ付かせていくに匂いにサイタマは目を
閉じたのだった。



ONEPUNCH-MAN
Fanbook

睡姦弟子

2015年7月19日初版初刷発行

発行——ハルキ
サークル名——おのみもの
印刷所——株式会社サングループ

この本のネット公開及び原作関係者の目撃れをよつな行為は違法と見做すこと。

本書についての感想・お問い合わせ

メールアドレス—onomi_mon@yahoo.co.jp

2014年夏のことでした。

とあるメールのやり取りでポンと送られてきた
サイジェノ睡姦SS。

それにどちゃくそ萌えた私は、このお話を漫画に
させていただきたいと思いすぐさまメールを送信
したのです。

そしてありがたいことに、こうして本にするお許し
までいただいてしまって、本当に言葉もありません！
元のお話と今回の漫画とは、展開などが違っているの
で…その…やりたい放題してすみませんとても楽しかった
です！！！！

今回は素敵なゲストをお呼びして素敵な本になりました。
この場をお借りして、その方とこの本をお買い上げいただいた
方に感謝もうしあげます。

2015年7月某日

おのみもの
ハルキ

睡姦弟子

原案・ゲスト：みまし(PixivID:2489392)

漫画・編集：ハルキ
(敬称略)

おのみもの

睡姦 弟子

すいかんてし

秒殺ノックアウト4
20150719

ワンパンマン
サイタマ×ジェノス